様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２３０５

研究課題名（和文）荻生徂徠の音楽に関する著作、及び研究と実践について－基礎的研究から全貌解明へ－

研究課題名（英文）OGYU Sorai on music, his musical research and practice: From basic research to a comprehensive picture of his work

研究代表者
山寺　美紀子（YAMADERA, Mikiko）

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：９０６０１０９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、各地に散在する荻生徂徠の音楽に関する一次資料を調査し、それらの系統の整理・翻刻・校合・訳注などを進めた。その結果、新出資料を含む、徂徠の音楽関連著作の全貌と、徂徠の音楽研究（特に、聖代たる中国周代の古制ならびに古楽を探求して行った楽律研究や、古楽が遺存するとみなした琴と日本の雅楽に関する研究など）の詳細を、ある程度明らかにすることができた。また、資料の内容を精読・検討することで、徂徠の音楽に関する事跡や、演奏実践の実態についても、多くの新知見を得ることができたため、論文等にて発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
荻生徂徠の音楽に関する著作は、既刊の徂徠全集には未収録である。本研究では、そのような徂徠の音楽関連著作と周辺資料の全面的な基礎研究を行い、いくつかの著述については、彼の見解の典拠も含め、詳細な訳注を作成し、部分的に公刊した。それらは、今後の徂徠研究や儒者の礼楽論の研究等に役立つであろう。また本研究では、新資料も紹介し、徂徠が何を行ったのか、という史実を掘り起こすことができた。本研究が示した情報は、音楽史の分野では見過ごされがちな、近代以前の東アジア漢字文化圏における音楽の有り様を見直す一つの視座となり、思想史の分野では、儒者徂徠の音楽研究と実践の実態を具体的に理解する一助となると期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated a wide range of primary sources of OGYU Sorai's writings regarding music. Organized by subject, I transcribed the texts into machine-encodings, collated them, and translated and annotated the texts. These efforts eventually revealed a complete picture of Sorai's writings—including newly-discovered materials—regarding music together with details of his musical research, in particular, his study of musical pitches through exploration of the ancient system of the Zhou dynasty-era of great rulers and investigating the music of antiquity, as well as his study of the Chinese qin and Japanese gagaku, both of which he claimed showed vestiges of ancient Chinese music. Careful reading and examination of the collected documents also delivered many discoveries and insights into historical traces of Sorai's work concerning music and the realization of those musical performances. These findings were presented in papers and other forums.

研究分野：日中音楽文化史――主に琴(きん、七絃琴、古琴)・楽律・楽譜を含む文献・儒者による研究と実践に関して

キーワード：荻生徂徠　古楽　雅楽　礼楽　楽律　琴　日本近世

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世日本を代表する儒者、荻生徂徠（1666-1728）については、これまで膨大な研究の蓄積があるものの、徂徠研究の中で、未開拓の部分が多く残されている分野がある。それは、音楽に関する分野である。

徂徠が礼楽の重要性を唱え、理想とされる中国古代の音楽を探求したことは、よく知られよう。このような徂徠の礼楽論における音楽観ないし楽論の形而上学的な面に関しては、主に思想史の分野で多く論じられ、研究が深められてきた。また、徂徠が門弟たちと音楽の実践を行ったことや、将軍徳川吉宗から音楽に関する仕事を命じられたことについては、断片的に知られており、これらに関する個別の研究も行われてきた。

しかし、徂徠が理想の古楽を求めて行った音楽研究の具体的な内容については、あまり知られていない。というのも、徂徠の音楽研究のうち、多くを占める楽理的研究の内容は、専門的な楽律・楽器・楽譜等に関する知識や実践経験なくしては理解困難であり、且つ難解で知られる徂徠の漢文を読み解く必要があるため、思想史・音楽史・漢文学のどの分野からも、見過ごされがちであったからであろう。それだけでなく、そもそも、徂徠が音楽に関する分野において、実際に何をし、何を残したのか、という事跡と著作、音楽実践の実態についても、未詳のことが多く、系統的かつ実証的な研究はなされてこなかった、というのが現状である。実際、既刊の『荻生徂徠全集』（みすず書房・河出書房新社）には、音楽に関する著作が収録刊行されずに今日に至っており、関連する資料の基礎的な調査も立ち遅れているため、徂徠の音楽著作の全貌も知られていない。また、徂徠の音楽に関する足跡は、彼の当時における影響力からして、幕政改革や、近世知識人層の知的活動に影響を及ぼしたと推察されるが、近世音楽史の中では、ほとんど言及されることがないままである。

このような状況に鑑み、研究代表者はかねてより徂徠の音楽に関する一次資料の収集・調査を進めており、次の①に関しては、すでに一定の研究成果を発表し、②③等に関する作業ないし考察を始めたところであった。

①中国の琴（きん、七絃琴、古琴）の古楽譜『碣石調幽蘭第五』（以下『幽蘭』と略記）に関する徂徠の研究の全貌、及び『幽蘭』と共に伝存した琴の古指法書『琴用指法』に関する徂徠の事跡と、それに関連する徂徠著『秋風楽章』の来歴について。[参考：山寺美紀子『国宝『碣石調幽蘭第五の研究』北海道大学出版会、2012 年]

②徂徠著『楽律考』の翻刻と訳注作成。[参考：山寺(小野)美紀子「荻生徂徠著『楽律考』訳注稿（一）」～「同（四）」『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 30～33 巻]

③徂徠著『楽律考』及び『楽制篇』『楽曲考』の成立事情と執筆時期に関する検討。[参考：山寺美紀子「荻生徂徠著『楽律考』の成立時期に関する一考察――荻生北渓著「楽律考解」(無窮会専門図書館神習文庫所蔵)の紹介を兼ねて」『東洋文化』復刊第 113 号、山寺(小野)美紀子「荻生徂徠著『楽律考』の執筆時期――『大楽発揮』五篇と楽書十巻(逸書)の関係性に着目して」『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 34 巻]

ただし、上記①～③の調査・研究の過程において、徂徠の音楽関連著述の大部分は、長期にわたり写本で流布し、日本全国に伝本が散在していること、まだ知られていない周辺資料も多く存すること、更には、徂徠の著作に対する誤認も見られることに気付かされた。そこで、徹底した資料調査と、系統的な基礎研究が必要であると認識し、本研究課題を設定した次第である。

２．研究の目的

本研究の目的は、荻生徂徠の音楽に関する著作の全貌、研究の詳細、演奏実践の実態と諸相を、実証的に解明することである。日本の学問・政治史上、重要な人物である儒者徂徠の、音楽に関連する事跡を掘り起こし、その楽理研究の内容を具体的に明らかにできれば、音楽史と思想史の両分野に新たな知見を提供し、各研究の発展に寄与できると考えられる。また、それによって、近代以前の文化・思想基盤における音楽の有り方を問い直すことにもつなげたい。あるいは、徂徠の研究成果を先行研究として参照することで、古代日中音楽史研究の進展につなげたい、というのも本研究の目的の一つである。

３．研究の方法

本研究では、次の二つの課題を策定し、それら両面から研究を進めるという方法をとった。

(1)音楽に関する著作（及び周辺資料）の完備に向けて――各著作（徂徠の著述のほか、徂徠の校正本、注解書等の周辺資料も含む）に対する伝本調査・校合・翻刻・現代語訳・注釈等の作業を進める。

(2)音楽に関する事跡・研究・演奏実践の実証的解明に向けて――(1)で扱う資料のほか、徂徠の書簡・書付・詩文、徂徠門弟の著作・書簡等からも、音楽に関する事跡・研究・演奏実践に関する記述を拾い出し、各事項が行われた時期・内容（実態）を考証・考察する。

４．研究成果

(1)資料の収集・調査、及び諸伝本の系統整理・来歴の検討

①徂徠の音楽に関する資料――徂徠の著作と周辺資料の伝本、徂徠の校正本といわれるもの、徂徠が参照した文献、徂徠門弟の著述、徂徠の影響を受けたとみられる後人の著作など――の収集・調査を行った。

実地調査に赴いた機関は、国立公文書館内閣文庫、東京女子大学図書館丸山眞男文庫、九州大学図書館、竹田市歴史資料館、佐伯市歴史資料館、住吉大社御文庫、静岡県立図書館葵文庫、宮内庁書陵部、神宮文庫、東京大学国文学研究室、筑波大学図書館、京都大学図書館、東京国立博物館(徳川宗敬寄贈書)、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫、国文学研究資料館(田安徳川家資料)、早稲田大学図書館服部文庫、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫、国会図書館古典籍資料室などである。その他、撮影・複写を依頼して写真・複写物から調査ないし再調査したものは、島根県立図書館、天理大学図書館、中之島図書館、静嘉堂文庫、飯田市立図書館などの資料である。

②徂徠の著作である『楽律考』『楽制篇』『楽曲考』(『大楽発揮』)『琴学大意抄』については、広く伝本を収集・調査して、それら諸伝本の系統を整理し、あるいは善本を選定し、各本の来歴について検討した。この作業により、例えば、物茂卿(＝荻生徂徠)撰『楽制篇』と題する写本の中には、偽書（内容は伊藤東涯著『制度通』、太宰春台著『経済録』、及び『蘐園談余』の各一部を併せ写したもの）も転写され流布しており、それが徂徠著『楽制篇』として誤って紹介されている例もあるため、注意が必要なこと、また、『楽律考』その他について、所蔵機関の目録や『国書総目録』及び国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースに、刊本と記載されているものが、実際は写本であることなど、いくつかの見直すべき書誌事項が明らかになった。

なお、以上の(1)における調査を基盤としながら、(2)以下の検討・作業・考究を進めた。

(2)新出資料（徂徠の音楽に関する著述と書簡）の発見と紹介

荻生家所蔵文書の写真複製版（東京女子大学図書館丸山眞男文庫所蔵）から見出した、徂徠の音楽（度量衡関係も含む）に関する新出資料 4 点――享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書――を翻刻し、それら資料の意義について検討した。

また、関西大学図書館泊園文庫所蔵藤澤東畡自筆稿本から、新たに、徂徠の書簡四通の写し（中根元圭宛て。朱載イク[土＋育]撰『楽律全書』校閲御用に関する内容）を見出したので、楽律に関する箇所を部分的に翻刻し、その来歴・意義についても考察した。

これらの新出資料については、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究会での口頭発表「荻生徂徠の音楽に関する新出資料の紹介――特に「三五要略考」と音楽に関する覚え書き、及び中根元圭に宛てた書簡を取り上げて」で、部分的に紹介し、更に、論文「荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について――享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡」(『関西大学東西学術研究所紀要』第 51 輯）にまとめて、発表した。

(3)徂徠の著作等の校合・翻刻・現代語訳・注釈の作成など

①徂徠著『楽律考』の将軍徳川吉宗への献上本を底本とし、田安徳川家旧蔵本等を対校本とした翻刻と訳注を進めた。特に、本書前半に述べる、中国歴代の基準音（黄鐘）の変遷に関する徂徠の見解については、周辺資料――徂徠著「度考」(『度量衡考』所収)、徂徠弟の荻生北渓著「楽律考解」、吉宗に提出された「荻生考」（内閣文庫『名家叢書』所収）の「周尺ノ考」「歴代尺ノ考」など――も精査し、徂徠の見解の典拠――どの漢籍の記述に基づいて各黄鐘律管長を如何に算出したのか等々――を解き明かしつつ、注に加えた。その一部として、「荻生徂徠著『楽律考』訳注稿（五）」(『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 37 巻）を公刊したが、本稿では、五代後周・宋・明の楽律（基準音）論争に対する徂徠の解釈や見解を、明らかにすることができた。

②『琴学大意抄』荻生家所蔵徂徠自筆稿本の翻刻と注釈を進め、その一部を、「荻生徂徠著『琴学大意抄』（荻生家所蔵 徂徠自筆稿本）注釈稿（二）」(『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 38 巻）として発表した。

③『楽制篇』については、上記『楽律考』や『琴学大意抄』のように、献上本や自筆稿本といった善本を見出せなかったため、『楽制篇』諸伝本（写本）の校合を行い、定本と下訳を作成した。

④『楽曲考』に関しては、諸伝本の内容の比較照合、書写者ないし旧蔵者の調査を行い、伝本

の系統について、ある程度の見通しをつけた。

⑤その他、徂徠の校正本と伝わる『胡琴教録』神宮文庫所蔵本と、その転写本とされる内閣文庫所蔵本の校合を行い、徂徠の著作の周辺資料（『楽律考』に関する太宰春台の書簡「答田安公問」など）の翻刻を適宜行った。

なお、本研究では、補助事業期間内に、『楽律考』『楽制篇』『楽曲考』『琴学大意抄』の訳注ないし注釈を完成させ、公刊することを計画していたが、予定よりも大幅に時間がかかり、研究代表者自身の力不足により、完遂することができなかった。ただし、大方下訳や草稿はできているので、今後、引き続き作業を進めて、順次公刊できるよう尽力したい。

(4)徂徠著『楽律考』及び『楽制篇』『楽曲考』の成立事情に関する再検討

『楽律考』の成立事情に関する従来の説を再検討し、他の著述との照合により、『楽律考』及び『楽制篇』『楽曲考』(『大楽発揮』)の執筆時期を比定した。これは論文「荻生徂徠著『楽律考』の執筆時期（承前）――他の著述との照合による比定、及び従来の説に対する再検討」(『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 35 巻）にて発表した。

(5)徂徠楽律研究の継承（特に荻生北渓の業績）に関する調査研究

徂徠著『楽律考』『楽制篇』(『大楽発揮』）の伝本と周辺資料の収集、及びそれら諸伝本の来歴（書写者や旧蔵者）の調査から得られた知見に基づいて、徂徠の楽律研究が後世、如何に継承され影響を与えたのかを考察した。まずは、徂徠弟の荻生北渓の業績を明らかにし、論考「荻生徂徠の『楽律考』『楽制篇』並びにその楽律論の継承と影響（その一、荻生北渓)」(『近世日本と楽の諸相』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 12）を公刊した。

(6)徂徠とその周辺における音楽実践の実態に関する考察

徂徠の詩文集『徂徠集』と、徂徠門弟の本多忠統（猗蘭)、安藤東野、太宰春台、秋本澹園、服部南郭、大潮元皓、大内熊耳らの詩文集から、音楽の実践に関する記述を拾い集め、可能なものについては、その執筆時期を推定し、徂徠の事跡との関連を調べて、時系列で並べるなどの作業を進めた。徂徠とその周辺で演奏実践されていたのは、主に日本の雅楽と中国の琴（きん、七絃琴、古琴）である。
そこで、まずは、徂徠とその周辺における音楽実践の実態を明らかにするために、徂徠が琴の実践的知識をいつどのように得たのか、また、徂徠と門弟たちはどのように弾琴を実践していたのか、という問題を考察した。そして、ある程度論考にまとめて、その前半部を、論文「荻生徂徠とその周辺における弾琴実践について（その一)」(『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 39 巻）として発表した。続きの部分については、今後、公刊していきたい。

(7)徂徠の琴学研究（特に『幽蘭』に関する研究）を中国の研究者に紹介

琴の古楽譜『幽蘭』と古指法書『琴用指法』に関する徂徠の研究を取り上げた既刊拙著（『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』）の中国語訳書（『碣石調幽蘭第五之研究』重慶出版集団・重慶出版社、2021 年）を出版し、中国の研究者に向けて、徂徠の琴学研究の実態や、それに関連する資料を紹介した。

(8)その他：関連して行った調査研究

①徂徠の没後、享保 20 年・元文 3 年に、将軍徳川吉宗の主導で琴の再興（日本の雅楽の管絃に琴を編入するというもの）が行われたことが知られる。これに対して影響を与えたと思われる、あるいは関連するとみられる徂徠の事跡、及び徂徠が古楽再興を意図して行った、琴の調・音律・絃などに関する研究や試みについて、調査・考察し、時系列で各事柄を挙げた。この問題については、吉宗の琴再興に関して論考をすでに発表されている山田淳平氏と、共同で、更なる検討を進めており、今後の研究課題としたい。

②徂徠学を信奉した江戸後期の儒者、藤澤東畡が遺した琴譜（関西大学図書館泊園文庫所蔵の東畡自筆本・手沢本）に基づいて、東畡が設立した泊園書院の釈奠などで江戸後期～明治期に演奏されていた琴歌「漁樵問答」「三才引」「帰去来辞」の再現演奏を行った（吾妻重二編著『「南岳百年祭」記念論文集』所収、山寺美紀子「古琴演奏――泊園書院の琴歌」附録 DVD)。なお、以上の調査・再現演奏の試みによって、この時期には徂徠学派といえども、徂徠が探求した古楽再興（琴の古楽譜『幽蘭』等により周・漢の遺音たる大楽を再興させるといった探求）はすでに受け継がれておらず、実際に演奏可能な琴歌を用いての礼楽の実践という柔軟な有り様に落ち着いていたことが、理解できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 山寺(小野)美紀子	４．巻 39
２．論文標題 荻生徂徠とその周辺における弾琴実践について（その一）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 國學院大學北海道短期大学部紀要	６．最初と最後の頁 95-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山寺(小野)美紀子	４．巻 38
２．論文標題 荻生徂徠著『琴学大意抄』（荻生家所蔵 徂徠自筆稿本）注釈稿（二）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 國學院大學北海道短期大学部紀要	６．最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山寺美紀子	４．巻 -
２．論文標題 琴(きん)（古琴・七弦琴）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 浜松市楽器博物館総合案内図録2020	６．最初と最後の頁 79-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山寺(小野)美紀子	４．巻 37
２．論文標題 荻生徂徠著『楽律考』訳注稿（五）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 國學院大學北海道短期大学部紀要	６．最初と最後の頁 61-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鄭珉中著、山寺美紀子・山寺三知訳	4．巻 16
2．論文標題 翻訳：鄭珉中著「正倉院の「金銀平文琴」について―中国の宝琴・素琴の問題を兼ねて―（その二）」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本伝統音楽研究	6．最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山寺美紀子	4．巻 51
2．論文標題 荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について――享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡	5．発行年 2018年
3．雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6．最初と最後の頁 111-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山寺美紀子	4．巻 12
2．論文標題 荻生徂徠の『楽律考』『楽制篇』並びにその楽律論の継承と影響（その一、荻生北渓）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告12：近世日本と楽の諸相	6．最初と最後の頁 123-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山寺(小野)美紀子	4．巻 35
2．論文標題 荻生徂徠著『楽律考』の執筆時期（承前）―他の著述との照合による比定、及び従来の説に対する再検討	5．発行年 2018年
3．雑誌名 國學院大學北海道短期大学部紀要	6．最初と最後の頁 13-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山寺美紀子	4．巻 81
2．論文標題 柴野栗山ら讃岐の先賢が嗜んだ「琴(きん)」について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 楷樹	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鄭珉中著、山寺美紀子・山寺三知訳	4．巻 14
2．論文標題 翻訳：鄭珉中著「正倉院の「金銀平文琴」について―中国の宝琴・素琴の問題を兼ねて―（その一）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本伝統音楽研究	6．最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山寺美紀子
2．発表標題 古琴演奏
3．学会等名 第60回泊園記念講座「南岳百年祭」(関西大学)（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 山寺美紀子
2．発表標題 中国伝来の現存最古の七絃琴譜、国宝『碣石調幽蘭第五』(唐代写本)について――資料紹介から復元演奏まで
3．学会等名 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター（プレ公開講座）公開プロジェクト研究会「儒教と文人の世界観に展開する「楽」思想の諸相研究」（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 山寺美紀子
２．発表標題 荻生徂徠の音楽に関する新出資料の紹介―特に「三五要略考」と音楽に関する覚え書き、及び中根元圭に宛てた書簡を取り上げて―
３．学会等名 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「近世日本における儒学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」共同研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 吾妻重二編著、町泉寿郎・山寺美紀子・長谷部剛・太田剛・井上孝榮・横山俊一郎・陶徳民・増田周子共著	４．発行年 2021年
２．出版社 関西大学東西学術研究所	５．総ページ数 269
３．書名 「南岳百年祭」記念論文集	

１．著者名 山寺美紀子著、徐Liang(木＋梁)・陶Yi(火＋習)訳	４．発行年 2021年
２．出版社 （中国）重慶出版集団・重慶出版社	５．総ページ数 399
３．書名 碣石調幽蘭第五之研究	

１．著者名 吾妻重二編著、山寺美紀子・長谷部剛・矢羽野隆男・横山俊一郎・中谷伸生・町泉寿郎・有馬卓也共著	４．発行年 2017年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 235
３．書名 泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関